

◆ 自然災害

日本では、地震に対する対策も必要です。関東地方では、いつ大地震が起きてもおかしくないような状態だと言われており、啓明学園でも、「地震が来たら机の下にもぐって、体を守ろう。」などと、地震に備える訓練をしています。

ところが、先日、実際に中越大地震を体験した方に、「震度7の揺れの中では、机の下にもぐるなどということはできませんよ。」と言われて愕然としました。「テレビやピアノが、あなたの方に向かって飛んできそうです。」ということで、日頃持っている大地震のイメージがいかに甘かったかと反省させられ、対応の指針を見直すことにしました。「学校にいる時大地震がきたら」「通学の途中で地震にあったら」などと、一応の想定をして、適切な行動の仕方を指導して来たつもりでしたが、実際に大地震を体験していない教師が通り一遍の説明をただけでは、効果のある指導にはならないと思われま

す。いろいろな情報をもとに、実際の地震がどのようなものなのかを子どもたち自身が具体的に想像して、自分で対応の仕方を考えてみることができるようにしなければなりません。一人で考えるだけでなく、友だちと考えを出し合って一緒に考えれば、さらにイメージがふくらむはずです。その過程では、当然、情報を整理して取捨選択することや、筋道を立てて考えを進めて行くこと、一つの考えを別の角度からみて再検討することなどが必要になります。防災教育は、災害に備えるだけでなく、人生のいろいろな場面で発揮できる想像力、判断力、思考力などを育てる教育活動になると言うことができそうです。

時には、台風や大雪などで休校になる日があります。そのようなときは、自然と力の大きさや、自然と人間との関わりについて考えさせるチャンスでもあります。

アメリカで私が勤めていたヴァージニア州の学校では、地震の訓練はありませんでしたが、「トルネード訓練」がありました。住んでいる地域がちがえば、災害もちがいます。外国に住む時などは、災害について学ぶことは、身の安全を守るために役立つと同時に、その土地の自然について理解を深めることにもなるでしょう。



◆ 個人に忍び寄る危険

先日、アメリカの生徒からの手紙の中に、学校に麻薬探査犬が来て、生徒のロッカーを調べたことが書かれていました。アメリカでは、若者が薬物にむしばまれる危険は深刻で、それだけに学校でもこの問題にかなり力を入れて学習させます。警察の方によれば、日本でも高校生や大学生の若者が薬物に接触するチャンスはいくらでも考えられ、けっして油断のできない状況なのだそうです。最近芸能人の薬物使用が発覚して大きく取り上げられることはありましたが、この分野に関しては、日本の学校や社会の取り組みはまだ十分ではありません。アメリカで薬物の恐さをしっかり学習して来た帰国生を通して、アメリカの取り組みを学ぶことも必要かもしれません。

インターネットや携帯電話のもたらす危険をどう回避するかも、さしせまった課題です。学校に警察その他の専門家を呼んで話してもらったりはしていますが、若者ほど情報機器を使いこなすことができる大人は少ないので、指導はなかなか行き届きません。

子どもたちを取り巻く危険は、社会や自然の変化とともに、少しずつ変わって来て、新しい危険も出現しています。しかも、一つの国の中だけでは解決できないことが増えています。帰国生に、外国の学校の取り組みの情報を提供してもらうことも役に立つでしょうし、姉妹校等の学校間の国際交流の中で、生徒だけでなく、大人の方も、情報交換をしたり、有効な対策を教え合ったりして協力していくことも積極的に進めて行くべきだと思います。



日本とアメリカで、新型（豚）インフルエンザが大流行です。症状は軽いというものの、患者数の急激な増加に伴い、死者も増えています。オバマ大統領の「非常事態宣言」が出るほどです。

子ども達の周りには、病気だけではなく、様々な危険が潜んでいます。グローバル社会の広がりを反映して、子ども達が抱えるその危険の広がり深刻さは、保護者が成長した時代とは比べものになりません。

子ども達が、危機に対する国際感覚を身につけることを願います。

啓明学園 初等学校・中学校・高等学校
国際教育センター

〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15

TEL : 042-541-1003

HP : www.keimei.ac.jp E-mail : kokusai_info@keimei.ac.jp